

平成21年6月1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520081

研究課題名（和文） イタリアにおける初期風俗画の成立と伝播に関する総合的研究

研究課題名（英文） General studies in the birth and the diffusion of the early genre paintings in Italy

研究代表者

宮下 規久朗（MIYASHITA KIKURO）

神戸大学・大学院人文学研究科・准教授

研究者番号：30283849

研究成果の概要：

16世紀後半に北イタリアで成立した風俗画が、いかにして成立し、普及したかを研究した。フランドルの影響の強いロンバルディア地方において、アールツェンやブーケラールの作品が重要されていたこと、それを模したヴィンチェンツォ・カンピらの活動が重要であった。一方、15世紀から16世紀初頭にミラノに滞在したレオナルド・ダ・ヴィンチの写実的な自然描写がレオナルド派の画家たちによって延命し、16世紀半ばにフィジーノやペテルツァーノに模倣され、それが若きカラヴァッジョにつながるという系譜をあきらかにした。かくしてフランドルの風俗画とレオナルドの自然描写のふたつが交錯した地点に初期風俗画が成立し、カラヴァッジョによってローマに伝播したという結論に達した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,000,000	0	1,000,000
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	480,000	3,980,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：風俗画 静物画 ロンバルディア レオナルド カラヴァッジョ カラッチ カトリック改革 バロック

1. 研究開始当初の背景

（1）申請者は長らく1600年前後のイタリア美術について、文化的・社会的背景から研究してきた。その際の中心が、16世紀後半からのカトリック改革とその主要舞台となったローマでの文化状況であった。カラヴァッジョの革新的様式がその中から生まれたこ

とを解明した。

（2）しかし、カラヴァッジョが行った革新的な自然主義と世俗的な主題の作品は、ローマだけでなく、カラッチ一族やパッセロッティのいるボローニャ、カンピー族のいるクレモナなどでも同時に見られ、それらの共通の

淵源を探る必要が生じた。

(3) フランドルでは 16 世紀半ばからアールツェンやブーケラールによって宗教画から風俗画への過渡期のような「二重空間」の作品が生まれたが、これがイタリアに流入し、受容されたことが、イタリアにおける風俗画の発生に関係するのではないかと推論し、ロンバルディアの伝統的な自然主義との関係も含めて、総合的に調査するのを感じた。アンニーバレ・カラッチやカラヴァッジョの一連の初期風俗画は、それぞれの作家研究の中でのみ行われていたが、こうした視点に立って総合的に考察したものは存在しなかった。また、わが国の南蛮風俗画もこの観点から捉えなおす必要があると感じた。

2. 研究の目的

(1) まず、16 世紀後半にロンバルディアやエミリアやヴェネツィアなど北イタリアの各地でほぼ同時期に登場した風俗画について総合的に調査し、フランドルとの関わりも含めて、なぜその時期にその地域で風俗画、あるいは風俗的な主題が勃興したかについて、図像・作品分析やパトロネージの面から考察し、こうした初期の風俗画が持っていた意味や主題について考察する。

(2) 本研究は、16 世紀後半におけるイタリアとフランドルとの美術交流を風俗画を通して考察するものでもあり、17 世紀以降さかんになるイタリアの風俗画の発端の様相、さらに南蛮美術の重要な源泉の一端をもあきらかにする試みである。単なる図像・様式比較やイコノロジー研究にとどまらず、様式と主題をふたつながら視野に入れ、その伝播と変容を明らかにする。

(3) イタリアでは近年、静物画の体系的な研究がさかんになったが、風俗画については不明な点も多く、17 世紀オランダ風俗画のような研究の蓄積はない。南蛮美術における風俗画研究も同様である。フランドル美術との関係というテーマは研究が深化しつつあるが、その成果も踏まえて、フランドルの風俗画とイタリアのそれとの関係をあきらかにする。また、近年その研究が多様化し、深まったカラヴァッジョ研究、および 1970 年代以降さかんになったアンニーバレ・カラッチ研究においても、初期の風俗画に関しては、本格的な研究は立ち遅れている。本研究では、カラヴァッジョとカラッチの出発点となった風俗画を再検討し、それがイタリア風俗画の中でもっていた意味について問い直す。それは、バロック美術の 2 人の先駆者が、いずれもなぜ風俗画から出発したのかという問題にゆきつき、風俗画こそがバロック美術誕

生のひとつの契機ともなりえたという仮説を提示する。

3. 研究の方法

(1) 作品と作家の基本的資料を収集する。欧米の美術館・画像資料館・図書館を調査する。版画資料によって図像の伝播と広がりを見考察すると同時に、油彩画がイタリアにおいて、いつどのように受容されたかについても調査し、考察する。北イタリアにおける風俗画の発生は、16-17 世紀のミラノ文化の推進者であったフェデリーコ・ボッロメオ枢機卿の美術理論と美術収集と関係があると思われるが、ロンバルディアにおける風俗画の流行を、ボッロメオ枢機卿の理論とコレクション活動という観点から具体的に考察する。

(2) 初期風俗画とその関連作品について、版画と油彩画の作例を画像資料として収集する一方、風俗画に込められた当時の宗教思想・神学上の問題を検討する。当時アントウェルペンやミラノ周辺で普及していた神学書や歴史書、説教師や文人たちの事績を広範に検討することがとりあえず有効であると思われる。それによって、風俗画の成立事情、つまり、なぜ初期の風俗画が宗教的な意味を宿さねばならなかったのか、またなぜ宗教的な意味を風俗画という形態に託さねばならなかったのかといった初期風俗画研究の根本的な問題を解明することが期待される。

(3) 本研究で扱う初期風俗画は、概して静物画と融合した状態のものが多く、両者は不可分の関係にあるため、その研究は必然的に静物画研究に抵触し、常に双方を視野に入れる必要がある。そのため静物画についても、風俗画と関係する範囲でできるかぎり調査するつもりだが、近年イタリアであいついで重要な静物画の展覧会が開催され、研究も飛躍的に進展してきたため、その成果を積極的に吸収し、取り入れることに努める。

4. 研究成果

(1) まずフランドル文化との接点からイタリアでもっとも早く風俗画が発生したロンバルディア地方の美術について調査し、関連資料を収集し、最近の研究成果を吸収した。具体的には、ロンバルディア風俗画の中心人物であるクレモナのヴィンチェンツォ・カンピによる一連の市場風俗画についての最新の展覧会カタログや研究論文などの資料を集め、その注文主や機能について考察した。また、大阪市美術館と千葉市立美術館で開催

された「ミラノ展」の学術監修を委嘱されたことから、ブレラ美術館やアンブロジーナ絵画館、ボルディ・ペッツォーリ美術館など、ミラノの諸美術館に所蔵される作品について調査することができた。こうした成果の一旦を展覧会カタログに執筆し、また大阪市美術館における講演で一般に披瀝することができた。

(2) これらの調査とは別に、美術史における回顧的記述と回顧的展覧会がいかなる条件の下に生じ、発展するかについて、主に近世イタリアと近代日本を例に考察した論文「美術史における回顧」を明治美術学会の学会誌に発表した。美術史を記述するとき、政治的な状況が作用するというだけの一般論でなく、国民国家が成立するときに自国の美術史が急遽、製造されるという現象が、明治の日本と独立後のイタリアに共通していたことを指摘した。このことは自国内の美術史だけで考察する危険性につながる。本研究では、イタリア風俗画の発生について考察しているが、巡礼者とともに国境を越えてヨーロッパ中の芸術家がしきりに往来していた16世紀から17世紀の西洋の状況を考えるときも、そのことを銘記しなければならないだろう。

(3) 17世紀初頭にイタリア各地に自然主義が伝播し、それが盛期バロックに変容したが、そこには各地の歴史と文化に結びついた複雑な要因があった。カトリック改革の厳格な様式から絶対主義に好まれた華麗な盛期バロック様式にいたる課程については、著書『イタリア・バロック—美術と建築』において、もっとも重要なバロック都市であるローマ、ナポリ、ヴェネツィア、シチリア、ジェノヴァなどに分けて詳細に跡付けた。絵画におけるカラヴァッジョとアンニーバレ・カラッチ以降のポローニャ派、建築におけるベルニーニとボッロミーニの重要性が浮かび上がったが、彼らの活動の根底にはローマのカトリック改革の宗教的精神があったということがあきらかになった。フランスやイギリスのような絶対主義の国民国家が成立し、イタリア半島の政治的・経済的地位の相対的低下が決定的となった17世紀末にイタリアにおいてバロック様式が爛熟したことの意味についても、このことと関連づけて説明できよう。

(4) フランドルの風俗画とイタリア美術との関係について調査し、その意味的連関と相違について考察した。その一端を含め、広く西洋美術全体における「食」の主題の意味と機能について考察し、著書『食べる西洋美術史』にまとめた。食材の表現や食事の情景を

扱った特徴的な作品をたどることによって、ロンバルディアにおけるフランドルのアールツェンやブーケラールの作品が受容されてそれがヴィンチェンツォ・カンピの風俗画および静物画に影響し、さらにそれが直後にポローニャのアンニーバレ・カラッチの初期風俗画に継承される過程を跡付けることができた。この成果は別の作例をあげつつ、論文「食と西洋美術」でも論じている。

(5) これらと並行してカラヴァッジョ研究も進めた。近年進んだカラヴァッジョ研究の成果に刺激され、新知見も織り込んで著書『カラヴァッジョ』を刊行した。さらにカラヴァッジョが育ったミラノ近郊の都市カラヴァッジョに調査に赴き、同地における素朴な信仰と地方様式の宗教画について調査した。また、「カラヴァッジョの聖母」とよばれる聖母顕現の根強い信仰が、《ロレートの聖母》に代表される画家のリアリズムのひとつの原点になったという確信を得た。都市カラヴァッジョの文化にはカトリック改革の推進地ミラノの影響が強く及んでおり、画家カラヴァッジョの画風形成と宗教性を考慮する上で無視できないことを感じた。その報告をはじめ、本研究の成果など新たな調査で得られた新知見の多くを著書『カラヴァッジョへの旅』において詳細に論じた。

(6) ロンバルディア地方における風俗画の発生について、16世紀中葉のフランドル絵画だけでなくより以前のレオナルド・ダ・ヴィンチの影響という観点から考察し、16世紀半ばのレオナルド派の画家たちにレオナルドから継承した自然主義的要素があったこと、さらにそれが16世紀後半のミラノ派の画家たちにも継承されていることを解明した。これがミラノで画風形成を行ったカラヴァッジョに決定的な影響を与えたと考えることができ、ローマで制作されたカラヴァッジョの初期風俗画にもレオナルド派の残滓を認めることができる。レオナルドからカラヴァッジョにいたるロンバルディア自然主義は、同地のフランドル風俗画受容の誘因ともなり、両者があいまってイタリア風俗画の発生と伝播に決定的な役割を果たしたということがあきらかになった。ロンバルディアにおけるこうした自然主義の鉅脈について、共著『レオナルド・ダ・ヴィンチの世界』に発表した。

(7) 上記の知見を総合し、カラヴァッジョの少年像の意味やロンバルディアにおける自然主義の伝統やフランドル風俗画の流入との関係について調査を進め、その一端を、シンポジウム「静物画の世界」(美術史学会・兵庫県立美術館主催)で「カラヴァッジョと

イタリア静物画の発生」と題して発表した。風俗画と静物画は切り離せるものではなく、これらが分化していったオランダやフランスに対して、イタリアとスペインではこれが同一視されて受容され、機能してきたことの意味について論じ、そこにイタリア風俗画の機能と意味が読み取れるのではないかとろんじた。こうしたことについては論文を準備中である。

(8) 本研究においては、北イタリアを源泉とする風俗画と静物画の発生過程と伝播の様相、そこに果たしたフランドルの風俗画とレオナルド派の様相、それらを継承して発展させたヴィンチェンツォ・カンピ、カラヴァッジョ、アンニーバレ・カラッチらの役割について多くを明らかにすることができた。しかし、当初の目的のひとつであった日本の南蛮美術における風俗画の意味と源泉については、調査を進めたものの、めざましい成果を得ることができなかったため、これについては今後も継続して調査していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①宮下 規久朗「食と西洋美術」『AUBE 比較藝術学』4/5合併号、2009年、87-104頁。査読なし

②宮下 規久朗「美術史における回顧」『近代画説』14号、2005年12月、35-45頁。査読あり

[学会発表] (計 7 件)

①研究発表、宮下 規久朗「カラヴァッジョとイタリア静物画の発生」「ウィーン美術史美術館所蔵 静物画の秘密」展記念シンポジウム、美術史学会主催、於兵庫県立美術館、2009年1月31日。

②発表、宮下 規久朗「造形から見たキリスト教と仏教」2008年度第3回言語・文化研究センター、於白百合女子大学、2008年12月12日。

③招待講演、宮下 規久朗「食と西洋美術」比較藝術学研究セミナー、於京都造形芸術大学、2007年12月4日。

④講演、宮下 規久朗「イタリア・バロック」東京大学教養学部連続講演「イタリアの言葉と文化」、於東京大学教養学部、2007年6月8日。

⑤研究発表、宮下 規久朗「死者の表象とその展示」「展示という語りの多義性と政治性に関する研究」研究会、於国立民族学博物館、2006年2月18日。

⑥講演、宮下 規久朗「ミラノ美術の魅力ールネサンスから現代まで」於大阪市美術館、2005年9月10日。

⑦研究発表、宮下 規久朗「ポローニャとロンバルディア」神戸大学美術史研究会、於神戸大学文学部、2005年8月10日。

[図書] (計 7 件)

①宮下 規久朗「カラヴァッジョー内在化された奇蹟」藤枝晃雄・谷川渥・小澤基弘編『絵画の制作学』日本文教出版、2007年10月、142-153頁。

②宮下 規久朗『カラヴァッジョへの旅ー天才画家の光と闇』(単著)角川選書、2007年9月。総267頁。

③宮下 規久朗「レオナルドの鉦脈ーミラノ派からカラヴァッジョへ」池上英洋編『レオナルド・ダ・ヴィンチの世界』東京堂出版、2007年5月、266-282頁。

④宮下 規久朗『食べる西洋美術史ー「最後の晩餐」から読む』(単著)光文社新書、2007年1月。総262頁。

⑤宮下 規久朗『イタリア・バロックー美術と建築(世界歴史の旅)』(単著)山川出版社、2006年11月。総174頁。

⑥宮下 規久朗『カラヴァッジョ(西洋絵画の巨匠11)』(単著)小学館、2006年11月。総127頁。

⑦宮下 規久朗「聖俗の食卓ーレオナルドからチェルテーティまで」『ミラノ展』カタログ、大阪市立美術館・千葉市美術館編、読売新聞社発行、2005年9月、20-22頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮下 規久朗 (MIYASHITA KIKURO)
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号 30283849

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし